

【柿の木と家郷】

私の民俗学の原点は、岡山県北部の蒜山といわれる山村に若い頃3年近く住んだことにある。山村の生活など何も知らなかったので何もかもが新鮮であった。どの家にもある柿の渋抜きの方法を覚えてもらったのもこの山村であった。みんなの入口後のぬるくなつた五右衛門風呂に渋柿を放り込んでおけば翌日には渋が抜ける。囲炉裏の灰のなかに突っ込んでおけば翌日には渋が抜ける。柿のへたを切つてそれに焼酎をぬる方法もある。昔は食べるだけではなく、柿の木から渋をとつていろいろ使つていた。甘柿は二日酔いにもいい。山村では、身の回りの自然を利用して自分たちでできることは何でもする生活であつた。柿の木はきわめて有用なものであつたが、なぜかそれだけではなく家郷を懐かしむといった感覚を惹起するものであつたようだ。芭蕉の「里ふりて柿の木もたぬ家もなし」は故郷・伊賀上野で詠んだ句だし、蕪村の「茂山やさては家ある柿若葉」も同じような感覚ではないのか。翠微にある代々続く家とそこにある柿の木のセットは懐かしい家郷という感覚と結びついている気がする。